

浜口ミホ先生の教え

小川信子

「日本住宅の封建性」*を読んだ時の印象は今でも鮮明に覚えています。敗戦を迎え、焼け跡に立って行く末考えていた学生時代に出版され、これからの日本住宅を考える時の指針ともなり、当時の座右の書ともなったのです。

その後、当時新建築の編集長であった川添登氏に同行し、浜口ミホ・隆一の自邸を訪問し、お話をうかがう機会がありました。隆一先生が作られたカレーライスをご馳走になり、男性が台所に立たれる姿を拝見して、これからの生活像を垣間見る思いがしました。

その後 PODOKO ニュースの第1号に、ミホ先生が寄稿してくださいました一文があり、ここに紹介いたします。

『激励のことば』 浜口ミホ

激励としては「ガンバレ！」の一言ですみそうです。でもガンバレるだけの元気は充分皆様お持ちのようなので、ガンバリ方というのでしょうか、ガンバレという言葉をもっと具体的にほぐしたら、どんなことか感じたことを申し上げてみましょう。

中略

残念な気持ちを何となしにまぎらわして忘れてしまわないように。それこそがガンバルことの足がかりと思います。その心の中のモヤモヤ、自分の感じていること、相手の考えとを、一人で或は友達と言葉にして考える努力、その努力の中に、自分が漠然と感じている表現出来なかったことをはっきりした形でつかめるようになるでしょうし、相手と自分の立場の違いもわかるでしょう。そうすれば次の機会にもう一度問題を持ち出し討論することが出来るでしょう。こうしたことが、足元をふみかためて一步一步階段を上がることの助けになるのではないのでしょうか。サロンでの会話は、その会の間の話のすすめ方が問題になりますが、ポドコの会員の方々のお話は、一年にわたり、二年にわたってもよいのではないのでしょうか。つまりもっと執拗に、もっと貪欲にということでしょうか。もっともこういう態度は、人あたりのよい人間をつくらなくて、角のあるギスギスした人間をつくるかも知れませんが、既存の婦人の美德には反するかもしれませんが、私が男の人たちに負けたいと感じさせられ、負けていながら感嘆させられるのは、いつもその点なのです。

例えば問題はどんなものでも、それを追いかけている時の男の人たちの迫力は、残

念ながら女の人たちにはまだ少ないようです。

中略

皆様の若さの元気のその上に、その事が身につくようになったら大したものだと思います。最後にもう一度、お元気で、そして”ガンバレ！”

長文になりましたが、先輩ミホ先生の一文に激励されたことでした。

青山にあった浜口ミホ住宅相談所には、私たちの仲間、福田（菅原）文子さんが勤務していましたので、その後も時々訪問していました。ミホ先生は日本の封建性社会が作り出した格式的な住宅に対しての疑問から、人間の暮らしについて深く考えられ、これからの住宅のあり方について私たちに語られました。時に厳しく、時に暖かく人間の生活の基本を変えようとなさっていました。特に 1955 年、日本住宅公団が発足し、集合住宅を計画するにあたり、住生活の要である台所の計画に先生のお考えを実現する機会があり、公団の標準型ポイントシステムの公団型台所の原型を計画中のお考えなど、伺うことができたのが、今思うと幸いなことでした。

* 浜口ミホ著「日本住宅の封建制」

初版 1950年2月15日 第1刷発行

復刻 1980年11月20日

東京建築士会 女性建築士委員会で先生の一周忌に際して復刻出版した。